

蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢

はしがき

後漢王朝の末期にあたる桓帝(在位一四六—一六七)と靈帝(在位一六八—一八九)の四十餘年間は、ひたすら衰亡崩壞の奈落へと急ぐ國家の末路に似つかわしく、陰濕で血腥い權力爭奪の死闘が間斷なく繰り返され、謀略がうずまき殺戮に明け暮れる凄慘酷薄な暗黒時代であった。今試みに、この期間における宮廷・政府關係の大事件だけを列挙してみても、順帝末期から桓帝前半にかけての外戚梁冀(？—一五九)の專横驕傲、ついで桓帝と宦官とによる梁冀政權の覆滅、外戚に代つた宦官勢力の傍若無人な驕侈暴虐とあくどい政界侵凌、宦官勢力の横暴に對する清流人士の激烈な抵抗運動、桓帝末年から靈帝初年にかけての二次にわたる大規模な黨錮の獄と清流黨人の壊滅、黃巾の亂につづく外戚何進(？—一八九)謀殺、袁紹(？—二〇二)による宦官勢力壓殺、董卓(？—一九二)政權の成立と董卓による天子廢立、獻帝(在位一九〇—二一九)の長安遷都、それから三年後の董卓暗殺、といった引きも切らぬ頻發ぶりである。

ところで蔡邕(一三二または一三三—一九二)は、このような後漢末期の陰慘な死闘時代と正にその生涯を重ね合わせて生きた文人であつ

た。のみならず彼は、これを文學史の上から見た場合、かかる殺伐非情な時代を生きたにもかかわらず、後漢初期の班固・崔駰、中期の張衡・馬融等による絢爛華麗な傳統的作風を承けて更にこれを洗煉し、當時の文壇に比類なく輝かしい文名を馳せたばかりか、後世の文學にも大きな影響を與えた中世屈指の文豪である。「後漢書」本傳は、彼の學問業績と文學作品を列挙して次のごとくいう。

其撰集漢事、未見錄以繼後史。適作「靈紀」及「十意」、又補諸列傳四十二篇、因李傕之亂、湮沒多不存。所著詩・賦・碑・誄・銘・讚・連珠・箴・弔・論・議・「獨斷」・「勸學」・「釋誨」・「敍樂」・「女訓」・「篆勢」・「祝文」・「章表」・「書記」、凡百四篇、傳於世。今これを後漢一代の大小文士九十餘家と比較するに、その作品様式之多様さにおいても、その作品篇數の膨大さにおいても、彼の作品は、全く餘人の追隨を許さないものがある。もって彼の非凡な文才と並並ならぬ創作意欲を窺うに足るであらう。

まことに蔡邕は、漢魏六朝の文學史を通じて最も傑出した文豪の一人であり、當時における文學の趨勢を考察する上でも極めて重要な文宗であつたといえる。にもかかわらず從來の文學史家は、なぜか蔡邕の文學に對して概ね冷淡であつて、私の知るかぎり、本格的に蔡邕の

岡村繁

文學と取り組んだ論考は殆どないといって過言ではない。⁽⁴⁾ 本稿は、そのうした従来の研究面での空白を若干ながら補うと共に、亂世に生きた蔡邕の文人的生活態度の實相、ならびに蔡邕を橋渡しとする後漢文學から建安文學への移行過程について、これを私なりに解明してみようとした一つの試論である。

一

蔡邕の文辭は、すでにその生前、當時の並み居る文人たちを遙かに凌いで世間から壓倒的に高い評價を受け、彼の輝かしい文名は、ほとんど絶對的なものでさえあったように見受けられる。例えば、後漢末期に至って爆發的な盛況をもたらした碑銘文學を取り上げてみた場合、その文章は、おおむね碑石の建立者が當時のめぼしい文人を選んで制作を依頼したものであるが、現存する當時の碑銘作品を通覽しても、實にその大半は蔡邕の藻翰によって占められている。この驚くべき事實は、疑う餘地なく彼の文章が當時の人びとの絶賛するところとなっていたことを物語るものであり、當時いかに多くの執筆依頼者が彼の門前に殺到したかを想像せしめるに充分である。『蔡邕別傳』に、

東國宗敬邕、不言名、咸稱「蔡君」。兗州陳留、並圖書蔡邕形像、而頌之曰「文同三閭、孝齊參騫」。〔太平廣記〕卷一六四引)

といひ、蔡邕を敬慕する當時の人びとが、彼の文章を絶賛して辭賦の始祖屈原（前三四三—前二七七）になぞらえている頌辭は、たとえそこに幾何かの誇張を含んでいたとしても、しかもなお當時の文壇における彼の卓越した巨匠的位置を象徴して餘りあるものといえるであらう。

ついで魏晉時代になると、このころの蔡邕は、しばしば先輩の張衡

（七八—一三九）と共に「張蔡」と併稱せられ、華麗綺靡な作風をあこがれる當時の文人たちの間で、時代的に身近な創作上の目安として特に強く意識される存在であったようである。例えば、華麗なることを詩賦の理想とした魏の文帝曹丕（一八六—二〇六）は、その『典論』論文篇において王粲と徐幹の辭賦を評して、

王粲、長於辭賦。徐幹、時有齊氣、然粲之匹也。如粲之「初征」「登樓」「槐賦」「征思」、幹之「女猿」「漏卮」「圓扇」「橘賦」、雖張蔡不過也。〔文選〕卷五二)

といひ、また西晉の陳壽（二三三—二九七）も、『蜀志』郤正傳評において郤正の文辭を評して、

文辭粲爛、有張蔡之風。

と稱しているが、このように曹丕・陳壽が、麗麗な作風を論評する際、いずれも特に「張蔡」をその引き合いに出して來ていることは、明らかに當時の人びとの張衡・蔡邕に對するそうした強い關心を示す事象である。

のみならず、張衡と蔡邕とについて、兩者に對する魏晉の人びとの關心の度合を比較した場合、蔡邕の方が、張衡よりも更に時代の近い文人であるだけに、より強烈で新鮮な印象をもって當時の文人たちに迎えられた可能性さえ頗る濃厚である。今その例證を蔡邕に最も近い建安文壇の作賦活動に求めてみれば、すでに鈴木修次氏の詳密な調査結果が示すごとく、當時の文人たちの作品の中には、同じ題材を共有していたり、類似の題材に従っている事例がしばしば認められるが、⁽⁵⁾ 試みに、これらの作品のうち明らかに建安以前の時代に先蹤を持つ題材の事例を拾い上げてみると、魏の始祖曹操の賦題を踏襲した諸作品を除いて、その他は總じて蔡邕のそれを先蹤とした作品ばかりであ

る。すなわち、蔡邕の「霖雨賦」を襲ったものに曹丕・曹植・應瑒の「愁霖賦」があり、蔡邕の「述行賦」を襲ったものに曹植・繁欽の同題の賦があり、蔡邕の「彈碁賦」を襲ったものに曹丕・王粲・丁翼の同題の賦があり、蔡邕の「圓扇賦」を襲ったものに曹植の「九華扇賦」「扇賦」、徐幹の「團扇賦」があり、蔡邕の「蟬賦」を襲ったものに曹植の同題の賦があること、その例である。もって蔡邕が建安文壇に與えた影響の並ならぬことを推知するに足るであらう。だとすれば、東晋の孫盛が、その『晉陽秋』に西晋の潘岳（二四八—三〇〇）の文章を評して、これを特に蔡邕と比較し、

岳、字安仁。滎陽人。夙以才穎發名。善屬文、清綺絕世、蔡邕。未能過也。（『世說』文學篇注引）

とあることも、やはり魏晋のそうした蔡邕に對する深い關心を反映したものと受け取ってよいように思われる。

ところで、蔡邕の文學が漢末魏晋の人びとを魅了せしめたゆえんのもの、すでに上述した事例からも推察されるように、その燦爛たる清辭麗文にあった。そして、これをさらに詳しくいえば、南齊の劉勰（？—四七三）が『文心雕龍』麗辭篇に、

自揚・馬・張・蔡、崇盛麗辭、如宋畫・吳冶、刻形鑱法。麗句與深采並流、偶意共逸韻俱發。

といい、また同じく事類篇に、
至於崔・班・張・蔡、遂摭撫經史、華實布覆、因書立功、皆後人之範式也。

と指摘したように、彼の作品の見事さは、その華麗多彩な對偶表現と博學精巧な典故援用にあったといえる。もつともこうした作風は、劉勰もいうように、前漢の司馬相如・揚雄、ないしは後漢の崔駰・班固

蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢

・張衡等のそれを踏襲するものではあつたけれども、蔡邕の文辭は、これら先輩の諸文豪を充分に乗り越え、さらに一步を推し進めるものであつた。なかんづく彼の碑銘文學は、駢文が精緻巧麗の極點に達する齊梁時代においてさえも、なお古今に冠絶する金字塔的存在であつた。ふたたび劉勰の『文心雕龍』を引用すれば、その銘箴篇に、

蔡邕銘思、獨冠古今。
と絶賛し、また誅碑篇にも、

自後漢以來、碑碣雲起、才鋒所斷、莫高蔡邕。觀楊賜之碑、骨鯁訓典。陳（寔）・郭（泰）二文、詞無擇言、周（覽）・胡（廣）衆碑、莫非清允。其敘事也該而要、其綴采也雅而澤。清詞轉而不窮、巧義出而卓立。察其爲才、自然而至矣。

と稱嘆しているのは、蔡邕の碑銘作品に與えられた當時の高い評價である。清の李兆洛（一七六九—一八四二）輯『駢體文鈔』三十一卷が、蔡邕の作品を収録すること實に二十九篇にも上り、庾信（五一—三三五）の三十四篇に次ぐ多數を誇っていることも、まことに故なしとしない。

二

それでは、蔡邕は、桓靈時代という彼等知識人にとって極めて險惡な受難の時期に生きながら、いったい如何なる機縁によつて、かかる貴族的な文藝の道に興味をいだくようになったのであろうか。思うに彼は、陳留郡國縣（河南省杞縣）において高氏と並ぶ富豪の家に生まれたといへ、父祖累代さほど文藝に深い關心を持つ家庭ではなかつたらしく、『後漢書』本傳も唯だ孤高守節の父祖を紹介するに止まつている。そして一方、彼の創作閑歴を覽れば、すでに彼は二十數歳の若

さにして「述行賦」「釋誨」という二篇の名作や「玄文先生李休碑」「汝南周總碑」等を選んでいる。このように考えてみると、彼が學問や文學に志したのは、その天賦の才能もさることながら、年若くして南郡の胡廣(九一—一七二)に師事したことが一つの大きな契機になったのではないかと思われる。その事に關して『後漢書』本傳には次のごとくいう。

少博學、師事太傅胡廣。好辭章・數術・天文、妙操音律。

また『蔡邕別傳』に、

邕與李則遊學。時在弱冠、始共讀『左氏傳』。性通敏兼人、學一

反三。(清惠棟『後漢書補注』卷一四引)

というのも、恐らくはその當時の事についての記述であろう。ちなみに胡廣は、公台に在ること三十餘年、六帝に歴史し、司空・司徒・太尉・太傅を歴任した漢代隨一の貴顯であり、風流の才に富み、學は五經を究め、古今の術藝にあまねく通じ、その文は典雅にして、『百官箴』四十八篇をはじめ詩・賦・銘・頌・箴・弔および諸解詁等、その作品も二十二篇に上ったといわれる(『後漢書』胡廣傳、ならびに李注引『謝承書』)。そして蔡邕は、よほど師の胡廣に心服していたらしく、後に靈帝の詔命によって作った「胡廣・黃瓊頌」をはじめ、「太傅胡廣碑」はもちろん「陳留太守胡頌碑」「董幼胡根碑」「交趾都尉胡府君夫人黃氏神誥」「太傅安樂侯胡公夫人靈表」「議郎胡公夫人趙氏哀讚」等、胡氏一族のために多くの銘墓を作っている。

ついで年若い蔡邕の文章に少なからざる影響を與えた人物は、南陽の朱穆(一〇〇—一六三)ではなかつたかと考えられる。なぜならば、第一に、東晋の『袁山松後漢書』に、

穆、著論甚美。蔡邕嘗至其家、自寫之。(『後漢書』朱穆傳注引)

とあって、蔡邕が朱穆の論著の甚だ美なることに強く心を惹かれた事實が認められるからである。第二に、延熹六年(一六三)夏四月に朱穆が京師で卒した際、當時三十歳前後であった蔡邕は、特に朱穆のために「朱公叔諡議」という力作を撰して「文忠先生」と諡することを入念に主張し、さらに「朱公叔鼎銘」「朱公叔墳前方石碑」という二文まで獻じてその德行を顯彰しているからである。第三に、朱穆が當時の偏黨派閥を打破するために著わした「絶交論」に感銘して、蔡邕はさらに「正交論」の一篇を撰し、もつて朱穆の誠意を世に喧傳しようとしたことさえあるからである。思うに、このように蔡邕が一人の人物に對して並ならぬ深い關心を示したことは、彼の少壯時代、師の胡廣を除いては極めて異例の行爲に屬するものと考えられ、いかに彼が朱穆の文辭や人柄を敬慕していたか、容易に推察することができるはずである。ちなみに、朱穆は、少くして英才があり、學は五經に明るく、學問に耽って銳意講誦し、ある時など思索に熱中するあまり、衣冠を亡失し抗岸に顛墜しても全然それに氣づかなかつたほどであつて、その作品には論・策・奏・教・書・詩・記・嘲など都合二十篇があつたといふ(『後漢書』朱穆傳)。

ところで、上述のように蔡邕が師事し敬慕した胡廣と朱穆の二人は、その性格こそ剛柔相反する人物ではあつたけれども、いずれも當時權勢を壟斷していた外戚梁冀(？—一五九)の恩顧を受け、その側近として仕える機會を與えられた知識人である。すなわち胡廣は、梁冀が大將軍となるや、その翌年の順帝漢安元年(一四二)には三公の司徒に拔擢せられ、ついで質帝崩後に太尉に昇任し、桓帝擁立の功をもつて育陽安樂郷侯に封ぜられており(『後漢書』胡廣傳)、しかも元嘉元年(一五一)、桓帝が梁冀を褒崇しようとして群臣にその優遇策を検討せ

しめた際、胡廣は羊溥・祝恬・邊韶等と共に梁冀の勲徳を稱揚し、宜しく梁冀を周公になぞらえて山川・土田・附庸(屬國)を下賜すべきことを建議している。かくして延熹二年(一五九)、頼む梁冀が誅せられた時には、彼は司徒韓續・司空孫朗と共に三公相連なり、梁冀に阿附したかどにより一旦は免廢の憂目を見ることになるのである(同上黃瓊傳)。また朱穆にしても、彼は、順帝末年に大將軍梁冀から辟召せられ、甚だ親任されたという歴歴たる梁冀の故吏であり(同上朱穆傳)、梁冀全盛の桓帝初年には侍御史となり、ついで議郎に遷って同僚の議郎延篤や太中大夫邊韶等と共に東觀で著作の事業に當っており、最後は尙書の官をもって卒している(蔡邕「朱公叔鼎銘」・『後漢書』延篤傳)。

このように見てみると、蔡邕が少壯のころ大きな影響を受けたと推定される胡廣と朱穆は、外戚梁冀が大將軍として正に旭日昇天の勢いにあった順帝末期から桓帝初期にかけての約十年間、官職の高下こそあれ、おおむね時を同じうして共に梁冀の側近にあったと判断してよい。だとすれば、これを學問・文學の面から見た場合、このころの宮廷は、すでに張衡(七八―一三九)が數年前に世を去り、崔瑗(七七―一四二)も間近に終焉を迎えていたとはいえ、彼等と比肩する一代の文豪―前述の馬融(七九―一六六)が、梁冀に阿諛しつつ宮廷文壇に獨り重きをなしていた時代である。そして當時、知識人たちの心をとらえた一般的な文學風潮は、宮廷の作風を頂點として、博學に裏打ちされた華麗彫琢の文辭への強い憧憬であった。例えば、馬融や張衡・崔瑗等とも交遊のあった隱士王符が、その『潜夫論』務本篇において、
今學問之士、好語虛無之事、爭著彫麗之文、以求見異於世。品人無識、從而高之。
といい、また

蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢

今賦頌之徒、苟爲饒辯屈蹇之辭、競陳誣罔無然之事、以索見怪於世。愚夫翹士、從而奇之。

というのは、強い憂憤と憎惡を含みながらも、なお當時のそうした文學風潮を直視した指摘である。

そして胡廣と朱穆は、かかる當時の文學風潮の頂點をなす宮廷のただ中であつた。恐らく胡廣は、馬融に凝集される後漢宮廷の傳統的な偶麗文學とその高度な學問水準に刺戟され、あらためてみずからの才學を磨礪するところが多かつたであらうし、さらに朱穆に至っては、宮廷の學問・文藝の中核である東觀に職を奉じた關係上、周圍の碩學や文雄たちから少なからず影響を受けたことと思われる。ちなみに、彼の東觀における前述の同僚延篤は、若くして馬融より業を受け、經傳・百家の言に博通し、能く文章を著わして、京師に名聲を博したという馬融直系の知識人であり、また邊韶は、前述のごとく當時胡廣等と共に朝議で梁冀の勲徳を稱揚した梁冀系の官僚であつて、文章をもつて名を知られ、門弟が數百人もあつたという「文苑傳」中の文豪である。

だとすれば、蔡邕の師承關係と彼の今後における清綺華麗な作風との間に、おのずから妥當な脈絡がついてくるはずである。すなわち、若き日の蔡邕が胡廣に師事し、朱穆の文辭を寫して學び取つたところの學問文藝は、正に上述のごとき梁冀を圍繞する當時宮廷のそれであり、馬融に凝集された兩漢傳統のそれであつたといえるのではあるまいか。思うに、相如・揚雄このかた彫琢磨礪を重ねてきた兩漢宮廷の貴族文學は、とりわけ賦頌文學の場合、對偶においても用典においても、張衡・馬融に至つて一應その技巧がそれなりの極點に達していたと見定めてよいであらう。だとすれば、さなきだに彫麗な文辭に憧れ

た當時一般の文學風潮の中にあつて、向學の意氣に燃える若い俊秀の蔡邕が、胡廣や朱穆を通して生々しく當時宮廷のかかる高雅な學問や華麗多彩な文學に接した時、それは、彼の目から見れば極めて魅惑的な對象と感ぜられたであらうし、みずからの生涯をかけてもよいほどの價値高い存在と映ったかも知れない。そして事實、彼は今後その長い生涯にわたつて文學と學問にその一身を託することとなるのであるが、かかる彼の文學と學問は、以上に述べたように、いみじくも宮廷の傳統的な貴族文學にびつたりとつながる、血統正しいものであつた。

三

蔡邕は、弱冠の時、せっかく京師に遊學して胡廣という當時の重鎮官僚に師事したにもかかわらず、以後三十八、九歳まで人生の約三分の二を郷里の陳留郡で過ごすことになる。これは恐らく少壯の彼にとつて頗る不本意なことであつたと思われるが、彼がそうした長い隱逸の生活を餘儀なくされた決定的な契機は、早くも彼の二十七、八歳の時、すなわち桓帝の延熹二年（一五九）秋八月、外戚梁冀が誅に伏し、恩師の太尉胡廣等も追放されて庶人となつた直後に訪れる。『後漢書』本傳に、

桓帝時、中常侍徐璜・左悺等五侯擅恣、聞邕善鼓琴、遂白天子、敕陳留太守督促發遣。邕不得已、行到偃師（洛陽の東郊）、稱疾而歸。閑居翫古、不交當世。

と記し、また彼自身の「述行賦」序にも、

延熹二年秋、霖雨逾月。是時梁冀新誅、而徐璜・左悺等五侯、擅貴於其處。又起顯陽苑於城西、人徒凍餓、不得其命者甚衆。白馬

令李雲（？—一五九）、以直言死、鴻臚陳君（大鴻臚の陳蕃）、以救雲抵罪。璜以余能鼓琴、白朝廷、敕陳留太守發遣。余到偃師、病不前、得歸。心憤此事、遂託所過、述而成賦。（本集）

と詳述する出來事がそれである。この兩文によれば、その年の秋、外戚梁冀一黨の覆滅後、それに代つて宦官の單超・徐璜・具瑗・左悺・唐衡等いわゆる「五侯」が宮廷において權勢を專擅しはじめた時、徐璜は蔡邕が彈琴の名手であることを聞き、特に敕許を得て、敕命をもつて陳留太守に蔡邕の上京を督促せしめた。それで蔡邕は、しぶしぶ洛陽東郊の偃師縣までは赴いたが、憤慨にたえず、假病をつかつてようやく引き返し、ついにそれ以後、もっぱら郷里での「閑居翫古」の隱逸生活に入つたわけである。

この時、蔡邕が敢えて隱逸生活に踏み切らざるを得なかつた理由ないし心情については、その直後に彼が綴つた「釋誨」と前述の「述行賦」との二作品に、一應みずから釋明すべき點が述べられている。なかんづく「釋誨」（『後漢書』本傳所載）の一文は、「述行賦」における彼の主張をも含み込んで、より詳しくかつ理論的である。そしてそこに縷縷陳述された内容は、私の見るところ結びの一節に要約されているようであつて、それは次の二つの釋明部分から成る。

その一つは、治世と亂世とにおける身の處し方を對比して、

若乃丁千載之運、應神靈之符、闔閭闔、乘天衢、擁華蓋而奉皇樞、納玄策於聖德、宣太平於中區。……龜鳳山翳、霧露不除、踊躍草萊、祇見其愚。不我知者、將謂之迂、脩業思貞、弃此焉如。靜以俟命、不數不渝、百歲之後、歸乎其居。……

というように、もしも千載の運に當り神靈の符に應ずる治世がめぐってきたならば、當然君側に赴いて奉公の誠を盡くす心算だけれども、

現在は賢人も山に隠れ闇愚がのさばる亂世だから、自分としては危難を避けて隠棲し、業を修め眞を思い、安らかに天命を全うするに如くはない、という明哲保身の主張である。^四

その二つは、前古における小技の巧手を列挙して、

昔伯翳(伯翳)綜聲於鳥語、葛盧(介葛盧)辯音於鳴牛、董父受氏於豢龍、奚仲供德於衡轡、倕氏興政於巧工、造父登御於驪驪、非子享土於善國、狼臆取右於禽囚、弓父畢精於筋角、狄非明勇於赴流、壽王(吾丘壽王)創基於格五、東方(東方朔)要幸於談優、上官(上官桀)効力於執蓋、弘羊(桑弘羊)據相於運籌。僕不能參跡於若人、故抱璞而優遊。

というように、自分としては、かかる古人のごとく、瑣瑣たる小技でもって貴顯の座興に供することは到底堪えられないところであるから、本来の素樸さを保って優遊自適の生活を樂しむのだ、という召喚拒否の辯明である。

まことに、このような明哲保身と召喚拒否の態度表明は、この時點における蔡邕の立場から見一應もつともな説得力のある言い分である。とはいえ、この「釋誨」にいうところは、私の推察するかぎり、あくまでも一應の表向きな意志表明でしかなかったのではないかと思われる。

なぜならば、まず第一に、彼が學問文藻の士としてではなく、「鼓琴」のような末技に目をつけられて宦官に呼び出されたという現實は、明らかに上京以後の彼の將來がさほどに約束されてはいないことを示唆するものであって、それぐらいのことは彼も充分すぎるほど豫測できたはずだと考えられるからである。

のみならず第二に、徐璜等宦官の側から見た場合、蔡邕は、今しが

蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢

た殲滅した外戚梁冀一黨の巨魁、太尉胡廣じぎの優秀な門弟である。そして他方、この事實を念頭に置いて、われわれが前述の『後漢書』本傳と「述行賦」序の文を讀みなおした場合、徐璜等は蔡邕の上洛を督促するために、わざわざ「天子に白し」救命の形式まで取り付けているが、かかる宦官の念入りな行動を見て、われわれは、一介の在野の書生を官廷に召喚する手續きとして異常なほどに手が込みすぎているのを感じ取りはしないか。思うに、この蔡邕召喚は、徐璜等が蔡邕の上洛拒否を充分に豫知しつつも、むりやりに彼を官廷に引張り出して琴を鼓せしめ、衆座の前で彼を辱しめようと企んだ、宦官らしい陰險な策略ではなかつたらうか。^四そして蔡邕は、そうした宦官の梁冀系人士に對する仕打ちを夙に熟知していたのではないかと思われる。

四

それでは一方、かかる宦官勢力に強く反撥し、このころから漸く熾烈になりはじめた清流人士たちの抵抗運動に對して、いったい蔡邕は、どのような態度をとっていたのであろうか。その事については、すでに彼自身が上述の「述行賦」序に「白馬令の李雲は直言を以て死し、鴻臚の陳君も雲を救ひしを以て罪に抵れり」といい、宦官の專横を天子に直諫して殺された李雲や、その李雲を辯護して免黜を被った陳蕃^四に深い同情と共感を寄せていることから窺われるように、心情的には彼は明らかに清流人士の側に立っていたといえよう。しかしながら、もともと學者文人として育った彼にとっては、李膺・杜密・范滂等を領袖とする過激な清流人士たちの行動には結局なじめなかつたらしく、そうした過激な行動的清流人士に對しては、かなり批判的で

あつたように見受けられる。そのためか、彼は、當時の太學が全國より諸生三萬餘人を集め、熾烈な宦官攻撃や時政批判を展開していたにもかかわらず、ひたすら郷里に隱棲し、ついに京師の清議には一度も参加していない。

ところで當時、蔡邕のみならず心ある知識人の間には、太學の清議や黨人の行動に對して相當に辛辣な批判があつたようである。范曄の『後漢書』は、その幾つかを傳えて次のようにいう。

(1) 仇覽、字季智。一名香。陳留考城人也。……覽入太學。時諸生同郡符融有高名、與覽比字、賓客盈室。覽常自守、不與融言。融觀其容止、心獨奇之、乃謂曰「與先生同郡壤、隣房牖。今京師英雄四集、志士交結之秋。雖務經學、守之何固」。覽乃正色曰「天子脩設太學、豈但使人游談其中」。高揖而去、不復與言。(循吏傳)

(2) 申屠蟠、字子龍。陳留外黃人也。……京師游士汝南范滂等、非許朝政、自公卿以下、皆折節下之。太學生爭慕其風、以爲文學將興、處士復用。蟠獨歎曰「昔戰國之世、處士橫議、列國之王、至爲擁篲先驅、卒有阮儒燒書之禍、今之謂矣」。乃絕迹於梁碭之間、因樹爲屋、自同傭人。居二年、滂等果罹黨錮、或死或刑者數百人。蟠確然免於疑論。(申屠蟠傳)

(3) 陳留老父者、不知何許人也。桓帝世、黨錮事起、守外黃令陳留張升、去官歸郷里、道逢友人、共班草而言。升曰「……今宦豎日亂、陷害忠良。賢人君子、其去朝乎。夫德之不建、人之無援、將性命之不免、奈何」。因相抱而泣。老父趨而過之、植其杖、太息言曰「吁、二大夫、何泣之悲也。夫龍不隱鱗、鳳不藏羽、網羅高懸、去將安所。雖泣何及乎」。(逸民傳)

仇覽が「太學は遊談するために建てられたのではない」と喝破し、申

屠蟠が「學生の横議は焚書坑儒の禍を招くぞ」と豫言し、陳留老父が「存分に暴れておきながら、今さら泣きじゃくって何になる」と慨歎している言葉は、今もなおわれわれの胸裏を突き刺すものがある。

また當時、つくづくと世の行く末を見つめる識者の間には、後漢王朝の命脈に對する絶望的な洞察もあつたようである。前例に倣つて『後漢書』からその挿話を引き出せば次のようなものが認められる。

(1) 徐禪(九七一—一六八)字孺子。豫章南昌人也。……禪嘗爲太尉黃瓊(八六一—一六四)所辟、不就。及瓊卒歸葬、禪乃負糧徒步、到江夏赴之、設雞酒薄祭、哭畢而去、不告姓名。時會者四方名士、郭林宗等數十人。聞之、疑其禪也、乃選能言語生、茅容輕騎追之。及於塗、容爲設飯、共言稼穡之事。臨訣去、謂容曰「爲我謝郭林宗。大樹將顛、非一繩所維。何爲栖栖不遑寧處」。(徐禪傳)

(2) 郭太(二八一—一六九)字林宗。太原界休人也。……司徒黃瓊辟、太常趙典舉有道。或勸林宗仕進者。對曰「吾夜觀乾象、晝察人事、天之所廢、不可支也」。遂並不應。(郭太傳)

そして蔡邕もまた、徐禪や郭太の豫言に若干先んじて、すでに後漢王朝のかかる命運を肌身に感じていたらしく、彼の「釋誨」に「夫れ九河盈溢すれば、一出(一塊の土)の防ぐ所に非ず。帶甲百萬なれば、一勇の抗する所に非ず」というのは、正にそのことを道破した絶望の言辭である。

一方、このような首都洛陽の重苦しく狂譚な政界情勢にひきかえ、蔡邕の隱棲する郷里陳留郡の雰圍氣は、少なくとも知識階層に關するかぎり相當にその趣きを異にしていたようである。たしかに當時の陳留郡は、隣郡の汝南・潁川と共に全國でも最も多くの知識人を輩出した地域ではあるが、汝南・潁川が共に黨錮關係の急進的な鬪士を數多

く首都に送り込み、當時流行した「汝頴優劣論」に象徴されるように、兩郡が互いに拮抗し優劣を競っていたのに對して、この陳留は、そうした強烈な政治性よりも、むしろ隱逸的文藝的な風趣の方が豊かであったらしく見受けられる。

そのことが窺われる具體的事象としては、まず一つには、さきに例示した當時の太學・黨人への辛辣な批判者が、仇覽にせよ申屠蟠にせよ陳留老父にせよ、いずれもそろって陳留の出身者かその在住者ばかりであり、しかも共に隱逸生活に入った人びとであったことを、その顯著な事象として擧げておいてよいであらう。

また二つには、當時の陳留郡が、他の地域を壓倒して優れた文人を少なからず輩出していることが注目される。すなわち、すでに梁冀の時代、朱穆や延篤と共に東觀において著作の任に當った邊韶（前出）が、やはり陳留郡の浚儀の人であって『後漢書』文苑傳にその名をつらね、詩・頌・碑・銘・書・策凡そ十五篇を著わしているほか、同じく文苑傳に見える張升もまた陳留郡の尉氏の人であって、彼は賦・誄・頌・碑・書凡そ六十篇を著わし、かつて郡齋に仕えていたころ「白鳩頌」一篇を撰し、

陳留郡有白鳩出於郡界。太守命門下賊曹吏張升作「白鳩頌」。曰「厥名臯鳩、貌甚雍容。丹青綠目、耳象重重。」（太平御覽）九二二引張升「白鳩頌」序

という挿話を傳えている。また同じく文苑傳に列せられた邊讓も、こ

れまた陳留郡の浚儀の人であって、彼は、
少辯博、能屬文。作「章華賦」、雖多淫麗之辭、而終之以正、亦如相如之諷也。（後漢書）文苑傳下

と評せられ、その代表作品「章華賦」の詠出ぶりを見ると、例えば、

蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢

章華臺上の妖艷な歌舞のさまを詠じて、

於是歡熯既洽、長夜向半、琴瑟易調、繁手改彈、清聲發而響激、微音逝而流散、振弱支而紆繞兮、若綠繁之垂幹、忽飄飄以輕逝兮、似鸞飛於天漢。舞無常態、鼓無定節、尋聲響應、修短靡跌、長袖奮而生風、清氣激而繞結。（同上）

のごとく全篇にわたって華麗淫靡な文辭を列ねている。このように「後漢書」文苑傳が、ほとんど時期を同じうする同郡の文人を三人も揃えて収録している事例は、陳留郡を措いて他にはない。

以上のごとき陳留郡にこそ顯著に認められる隱逸的・文學的事象から見ると、あるいは當時この郡は、汝頴兩郡とは自ら異なり、かかる隱者文人を輩出し得るような獨特の文化的風土をそなえた、いわば當時における地方文化の一大淵藪ではなかったか、と考えられる。當時この地を訪れた京兆の趙岐（？—二〇二）が、見渡すかぎり藍草の植わった田園を見て驚き、その「藍賦」序に、

余就醫偃師、道經陳留。此境人、皆以種藍染紺爲業。藍田彌望、黍稷不植。慨其遺本念末、遂作賦曰「同丘中之有麻、似麥秀之油油。」（藝文類聚）卷八一引

と指摘しているが、かかる陳留郡特有の非實用的農作形態は、恐らく上述のごとき當郡の高度な文化的獨自性と無關係な現象ではないであらう。

のみならず、今試みに文辭の精粹ともいべき賦頌文學を取り上げ、蔡邕および上述した陳留の文人たちと他の地域の諸作家とを比較した場合、陳留郡の文學的水準の高さは正に歴然たるものがある。例えば、漢陽（湖北省武漢市）の趙壹は、文苑傳にもその名をつらね、比較的その作品も多く残存している同時期の作家であるが、その代表作

「窮鳥賦」「刺世疾邪賦」(『後漢書』文苑傳下所載)にしても、題材の特性によるとはいへ、ただ激しい意識だけが先走った、乾涸びた字句の折り重ねであつて、陳留文人の豊潤華麗な作風には到底比ぶべくもない。

恐らく蔡邕は、こうした郷里陳留郡の豊かな隱逸的文藝的風土の中で、首都洛陽の喧噪から身を避け、學問と文筆に沈潜しつつ、靜かに時機の到來を待っていたのであらう。

五

蔡邕が漢魏の文學史上で特に大きな役割を果す時期は、いうまでもなく彼の前後二次にわたる官廷仕官時代である。そして、その第一次の上洛仕官は、清流黨人が宦官勢力のために盡く肅清された直後の靈帝建寧三年(一七〇)、彼の三十八、九歳の時から約九年間、また第二次の官廷仕官は、董卓の強迫によるものとはいへ、とにかく宦官勢力が袁紹のために悉く誅滅された直後の中平六年(一八九)、彼の五十七、八歳の時から約三年間である。思うに、かかる彼の仕官閱歴を見れば明らかなように、彼が前後二回にわたつて洛陽での仕官に踏み切つた時期は、いずれも黨人とか宦官といった従前の強大な政治勢力が徹底的に潰滅した直後に當つており、こうした彼の上洛の仕方は、中央進出に對する彼の困惑を推察する上でかなり重要な意味を持つてゐる。恐らく彼は、衰滅に近い後漢王室のために盡力するというよりも、むしろ險惡な政争に巻き込まれる心配が一應消滅した時點を彼なりに見きわめ、學者文人として自らの才學を存分に發揮すべく、その活躍の場を首都洛陽に求めたのではないかと思われる。

蔡邕の第一次の上洛仕官は、人物鑒識の譽れ高い司徒橋玄(一〇九—

一八三)の辟召によるものであつたが、その當時、彼の恩師胡廣はすでに官界に復歸し、太傅として朝廷の最高位にあつたことから考へると、あるいは橋玄の辟召も胡廣の推輓があつたからかも知れない。とにかく橋玄に辟された蔡邕は、それから暫く出だされて河平(平阿?)縣長に補せられたとはいへ、間もなく官廷に召されて郎中から議郎に昇進した。果せるかな、彼の議郎時代における學問・文學面での活躍は、正に刮目に價するものがあつた。

その業績の第一は、いわゆる「熹平石經」の建立に當つて、彼がその中心的な役割を果したことである。すなわち『後漢書』本傳にいう。

邕以經籍去聖久遠、文字多謬、俗儒穿鑿、疑誤後學。熹平四年(一七五)、乃與五官中郎將堂谿典・光祿大夫楊賜・諫議大夫馬日碑・議郎張馴・韓說・太史令單颺等、奏求正定六經文字。靈帝許之。邕乃自書丹於碑、使工鐫刻、立於太學門外。於是後儒晚學、咸取正焉。及碑始立、其觀視及摹寫者、車乘日千餘兩、填塞街陌。

その業績の第二は、同僚の議郎盧植(一五九—一九二)・韓說等と共に東觀にあつて『後漢記』を撰補し、特に彼は恩師胡廣から讓與された史料をも利用して「十意」(「十志」と同じ)を完成しつゝあつたことである。彼が當代隨一の漢代史學の大家であつたことは、後に彼が王允(一三七一—一九二)に殺された時、北海の鄭玄(一二七—二〇〇)が「漢世の事、誰と與にか之を正さん」と歎いたことによつても知ることができる(『後漢書』本傳、ならびに李注引『魯別傳』)。

その業績の第三は、官廷文人として靈帝に侍し、數多くのすぐれた作品を撰じていることである。例えば『後漢書』胡廣傳に、

熹平六年（一七七）、靈帝思感舊德、乃圖畫（胡）廣及太尉黃瓊於省
內、詔議郎蔡邕爲其頌云。

というように、靈帝の詔を受けて作ったことの明らかな「胡廣・黃瓊頌」（胡廣傳注引『謝承書』）をはじめ、「車駕上原陵記」「上始加元服與群臣上壽章」「曆數議」「難夏育請伐鮮卑議」「銘論」「明堂論」「月令論」「日食上書」「伯夷叔齊碑」等、および失脚直前の「對詔問災異八事」「上封事陳政要七事」の諸作品が、彼の議郎時代の公的な所撰と確認できるものである。

その他、この時期には私的に撰した文辭も少なくない。すなわち、自分を洛陽に辟してくれた故君橋玄のための「東鼎銘」「中鼎銘」「西鼎銘」「黃鉞銘」、恩師胡廣に關わる「太傅胡廣碑」「太傅祠堂碑銘」「太傅安樂侯胡公夫人靈表」をはじめ、「彭城姜肱碑」「太尉李威碑」「太尉陳球碑」「太尉陳公贊」「桓彬碑」等がそれである。ちなみに姜肱（九七一・七三）は、五經に博通し星緯に明るい碩學であったと共に、終生隱逸に徹した清介の士であり（『後漢書』姜肱傳）、李威（一〇〇一・一七五）・陳球（一一八一・一七九）は共に身をもって宦官に抗した廉直の臣であり（陳球傳）、桓彬（一三三一・一七八）は學優れ文麗しく志操を守った蔡邕の舊友である（桓彬傳）。

また彼の議郎時代、その學藝を共にした同僚としては、爾後終生刎頸の友であった涿郡の盧植（一五九・一九二）をはじめ、前述の馬日碑・張馴・韓說・單颺や楊彪等の名が擧げられる。盧植は若くして鄭玄と共に馬融に師事し、辭賦こそ好まなかったが學は古今に通じて、碑・誄・表・記凡そ六篇を著わしたという（『後漢書』盧植傳）。馬日碑（？・一九四）は馬融の族子であつて、若くして盧植と同じく馬融より業を受け、才學をもつて榮進し遂に台輔に登つてゐる（『魏志』袁術傳注

蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢

引『三輔決錄注』）。張馴は『春秋左氏傳』『大夏侯尚書』に精通した儒林傳中の學者であり（儒林傳上）、韓說是五經に博通し最も圖緯の學を善くし、賦・頌・連珠にも巧みな方術傳中の人物であり（方術傳下）、單颺も天官・算術に明るく、同じく方術傳に名を列ねてゐる（同前）。そして楊彪（一四二・二三五）は當時の光祿大夫楊賜（前述）の嗣子であると共に、後に建安文壇で活躍する楊脩（字は德祖）の父であつて、前漢以來累世の名門に生れ、熹平年間、舊聞を博習せるを以て特に徵されて議郎となり、東觀において蔡邕・盧植等と共に秘書校讎の任に當つてゐた（楊彪傳）。

のみならず蔡邕は、この議郎時代、すでに宮廷文人たちの中心的な存在であつたように見受けられる。というのは、上述した東觀の諸學士も恐らく多く參加したであろう百官大會の席上で、彼が文辭の制作・評論の先頭に立つてゐたらしい形跡が認められるからである。すなわち『後漢書』文苑傳下（高彪）に、

高彪（？・一八四）字義方。吳郡無錫人也。……除郎中、校書東觀、數奏賦・頌・奇文、因事諷諫、靈帝異之。時京兆第五永、爲督軍御史、使督幽州、百官大會、祖餞於長樂觀。議郎蔡邕等、皆賦詩、彪乃獨作箴曰「文武將墜、乃俾俊臣。云云」。邕等、甚美其文、以爲莫尙也。

という右の記事の書きぶりは、そのような彼の宮廷文場における主要な位置を推測せしめるに足る事象である。なお、蔡邕は魏の太祖曹操（一五五・二一〇）とも親交關係があつたが（後述）、その曹操の眞價を最初に見出した鑒識の士が外ならぬ橋玄であつたことから考えると、蔡邕と曹操との交遊も、恐らく蔡邕が橋玄に辟召された頃から始まつたと推定してよいように思われる。

ところで、このように議郎として東觀に重きをなしていた蔡邕が、心ならずも失脚の悲運に陥る重大な契機となったものは、熹平六年（一七七）から翌光和元年（一七八）二月にかけての「鴻都文學」の設置であった。この「鴻都文學」設置の経緯については、『後漢書』本傳に、

初（靈）帝好學、自造『皇義篇』五十章、因引諸生能爲文賦者。本頗以經學相招、後諸爲尺牘及工書鳥篆者、皆加引召、遂至數十人。侍中祭酒樂松・賈護、多引無行趣勢之徒、並待制鴻都門下、意陳方俗閭里小事、帝甚悅之、待以不次之位。……光和元年、遂置鴻都門學、畫孔子及七十二弟子像。其諸生、皆敕州郡三公舉用辟召、或出爲刺史・太守、入爲尚書・侍中、乃有封侯賜爵者。士君子、皆恥與爲列焉。

と略述し、また同書靈帝紀（光和元年）李注によれば、創設時の鴻都門學生は、尺牘・辭賦に長じ鳥篆に巧みな者が千人にも至っていたという。思うに、この「鴻都文學」設置は、これによって惹起されたさまざまな反應現象を總合して見た場合、明らかに靈帝の文藝愛好を悪用した宦官曹節等の自派勢力擴張策であり、また太學・東觀の學識人士を封じ込め形骸化するための謀略であったと判断される。従って、「鴻都文學」設置への反撥は、主として東觀支持者の間から猛烈に起つてきた。その反對意見の現存するものは、光祿大夫楊賜・議郎蔡邕および尚書令陽球等三人の上奏文である。恐らく當時で最も際立った抗議であったのであろう。

なかならず當時現役の議郎として東觀にあった蔡邕の章奏は、彼自身にも直接關わる重大な問題であったためか、平素の雍容さに似合わず激越で刺戟的なものであった。すなわち光和元年七月の章奏は、靈

帝から直直彼だけに特別の詔問を賜わり極秘の中に奉答した意見書であつて、その内容は、側近女官・宦官・高級官僚の頽廢ぶりを名指しで誹謗し、天子が純厚忠直の臣に國事を諮問し、尙方工技の作・鴻都篇賦の文を廢止するよう獻言している。そしてその最後に彼は、天子がこの章奏を絶対に外部に漏洩しないよう執拗に懇願し、自分が姦仇の怨みをかつて失脚の禍を受けないように、くれぐれも細心の注意をはらつてほしいと訴えた。

もし蔡邕の期待どおり、靈帝がこの秘密を嚴守し適切な對應處置を取ることができていたならば、これは蔡邕にとつて更に輝かしい現在および將來を約束するものであつたにちがいない。しかし現實は、彼のかかる願望も空しく宦官曹節によつてこの章奏が暴露されてしまひ、さらに平素における司徒劉郗（？一七九）との不和も祟つて洛陽の獄に繋がれ、わずかに死一等を減ぜられはしたものの、家屬ともども髡鉗されて朔方へ流されるという殘酷な仕打ちを蒙るに至つた。

六

朔方に流された蔡邕は、幸いにして早くも翌年大赦の恩典にあずかり、以後十二年間、身の危険を避けて遠く南のかた吳郡・會稽の地に隱棲することになるが、その蔡邕が、長い在野の期間を経て再び中央の宮廷に返り咲き、彼の生涯でも最も華やかな得意絶頂の時期を迎えたのは、宦官勢力が一掃された直後の董卓政權時代であつた。獻帝の中平六年（一八九）、彼の五十七、八歳の時から王允に殺されるまでの約三年間がこれに當る。

そのはじめ蔡邕が董卓政權に参加した経緯は、實のところ董卓（？一八九）が逡巡する蔡邕を脅迫して強引に招き寄せたものではあつた

が、一旦彼が上洛するや、董卓の彼に對する厚遇ぶりは非常なものであった。すなわち彼は、最初から祭酒を代行して甚だ敬重せられ、ついで高第に擧げられて、侍御史・治書御史・尙書という調子で三日の間に三臺を周歴し、さらに巴郡太守に遷り、再び歸洛して侍中となり、早くも翌初平元年（一九〇）には左中郎將を拜せられ、獻帝の長安遷都に従つて高陽郷侯に封ぜられた。こうした短期間の異例な昇進は、彼自身にとつても全く夢のような心地であつたらしく、「讓高陽侯印綬符策」（本集）に、

臣稽首受詔、怔營喜懼、精魄播超、恍惚如夢、不敢自信。

といつているのも決して單なる儀禮的言辭ではなかつたであらう。まことに蔡邕の才學に對する董卓の信頼は極めて厚く、當時に關する史書に、

卓重其才、厚遇之、每有朝廷事、常令邕具草。〔魏志〕董卓傳注引

〔張璠漢紀〕

卓重邕才學、厚相遇待、每集議、輒令邕鼓琴贊事。邕亦每存匡

益。〔後漢書〕蔡邕傳

等とあるのは、日常における董卓のそうした信任と厚遇を示す記事である。

一方、蔡邕も董卓の知遇に應えるところが少なくなかつた。今それを文辭の面だけに限定して考えても、まず中平六年（一八九）冬には、太尉の董卓を相國に薦めるために「表太尉董公可相國」（本集）を撰して、例えば、

太尉郎侯卓、起自東土封畿之外、義勇憤發、旋赴京師、先陳便宜、列表奸猾羣慝情狀、辭意激切、感物寤靈。精兵虎臣、承持卓勢、奪擊醜類、漏刻之間、靡有孑遺。卓聞乘輿已趨河津、身率輕

蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢

騎、長驅芒阜、上解國家播越之危、下救兆民塗炭之禍。然後黜廢頑凶、爰立聖哲、天心聿得、萬國賴祉。

のごとく文辭を盡くして董卓の功德を稱揚しているし、また初平年間、董卓の意を承けて、後漢の宗廟中で特別な功德もない和帝以下の宗廟を全廢するよう建言した「宗廟迭毀議」（本集）を撰したり、初平元年（一九〇）、董卓の指示で長安に遷都した獻帝のために、「宗廟祝嘏辭」（本集）という落魄の天子に似つかわしい寒寒とした告廟文を奉撰したりもしている。恐らく當時の蔡邕は、すでに滅亡寸前の後漢王朝には一片の未練もなく、ひとえに董卓の庇護にすがり、いわば學問文藝面での最高顧問として、これら各種の撰文以外にも董卓のために多様な貢獻をしていたことと思われる。

もっとも、こうした蔡邕にも、時としては、自分の意見を董卓が聽き入れないために兗州・山東へ遷逃したい旨、從弟の蔡谷に洩らしたこともあるにはあつた。しかし、後に董卓が司徒王允の謀略によつて殺された際、その王允が、蔡邕のふとした舉動を口實にして敢えて彼を殺害したことに想到するならば、いかに蔡邕が董卓に密着した存在であつたか、推測するに難くはないであらう。

かくて當時の蔡邕は、その高い地位と優れた才學から見て當然のことながら、多くの知識人たちの偶像的存在であつた。『魏志』王粲傳にいう、

時（蔡）邕才學顯著、貴重朝廷、常車騎填巷、賓客盈坐。

の文に窺われるごとく、蔡邕の坐に大舉來集する賓客の盛況は何よりもその事實を明確に表現するものである。そして、この事實は、これら多くの賓客の中において、すでに蔡邕を領袖とする一種の文學的な集團が形成されていた可能性を示唆するものではないだろうか。今試

みに、この時代に生きた文人たちの履歴を検してみると、恐らくは當時蔡邕の許に出入していたと推定できる文人が一再ならず認められる。

すなわち、その一人は王粲（一七七一—二一七）である。蔡邕と王粲との並ならぬ關係については、『魏志』王粲傳が、前述の例文四句を含んで次のようにいう。

王粲、字仲宣。山陽高平人也。曾祖父龔・祖父暢、黨錮八俊の一人、皆爲漢三公。……獻帝西遷、粲徙長安。左中郎將蔡邕、見而奇之。時邕才學顯著、貴重朝廷、常車騎填巷、賓客盈坐。聞粲在門、倒屣迎之。粲至、年既幼弱、容狀短小、一坐盡驚。邕曰、「此王公（王暢）孫也。有異才、吾不如也。吾家書籍文章、盡當與之。」

この文によれば、幼弱ながら王粲は、この時より以前から蔡邕にその非凡な才智を認められており、かつ蔡邕から非常な厚遇を受けていたことが明らかに推知できる。もつとも、年端もゆかぬ王粲に對する蔡邕のかかる絶賛ぶりや特別な心遣いは、われわれの目から見ても甚だ奇異で唐突に感ぜられ、明らかに常軌を逸しているように受け取れる。思うに、このような蔡邕のわざとらしい態度は、當時董卓がその政策上きわめて意欲的に清流人士を登用していた實狀（『後漢書』董卓傳）に即應して、殊更に賓客列坐の前で自分の黨人敬重の態度を強調し宣傳しようと思圖したのではなかつたか。とはいへ、それだけに蔡邕は、この王粲の學問文藝に對して特別ねんごろに目をかけたことと思われる。後に王粲は、曹丕の『典論』論文篇において「王粲は辭賦に長ず」と賞賛されるが、そのように卓越した王粲の辭賦文學は、蔡・王兩者の酷似した作風から推して、恐らくは蔡邕直傳のものであつたはずである。

また孔融（一五三—二〇八）も暫時蔡邕と共に董卓の下にあつた。これよりさき孔融は靈帝時代に司徒楊賜（前述）の府に辟されておられ、楊賜と蔡邕は肝膽相照す間柄であつたので、すでにこのころ蔡邕と孔融も交遊の機會を持った可能性は少なくないが、明確なことはわからない。しかし董卓政權成立後においては、『後漢書』孔融傳に、

會董卓廢立、融每因對答、輒有匡正之言。以忤卓旨、轉爲議郎。時黃巾寇數州、而北海最爲賊衝、卓乃諷三府同學融爲北海相。というように、孔融は京師在任中、主として議郎の官にあつた關係上、學問や文學の面で當然蔡邕と頻繁な往來があつたに相違ない。蔡邕歿後のこと、同じく孔融傳に、

（孔融）與蔡邕素善。邕卒後、有虎賁貌類於邕、融每酒酣、引與同坐、曰「雖無老成人、且有典刑。」

と見えるような孔融の蔡邕に對する深い友情は、恐らくその議郎時代に芽生えたものであろう。

また邯鄲淳は、かつて蔡邕が碑文を撰した度尙（二一七一—一六六）の門弟であつて、彼と蔡邕との關係を物語るものとしては、晋の虞預の『會稽典錄』（『後漢書』列女傳注引）に見えるところの

上虞長度尙弟子邯鄲淳、字子禮。時甫弱冠、而有異才。尙先使魏朗作「曹娥碑」、文成未出。會朗見尙。尙與之飲宴、而子禮方至督酒。尙問朗「碑文成未」。朗辭不才、因試使子禮爲之、操筆而成、無所點定。朗嗟歎不暇、遂毀其草。其後蔡邕又題八字曰「黃網幼婦、外孫豔曰」。（この八字は「絕妙好辭」の意）

のごとき逸話がある。蔡邕が邯鄲淳の「曹娥碑」に八字を題した時期は、恐らく蔡邕の會稽隱棲時代のことと思われるが、もしそうだったとすれば、蔡邕の題字後いくばくもない初平（一九〇—一九三）の時、

この文辭に巧みな邯鄲淳は明らかに三輔（長安）に滞在していたことになる（『魏志』王粲傳注引『魏略』）。そして彼は、度尙の門弟であり「曹娥碑」にまつわる縁由もある以上、かなり親しく蔡邕の許に出入していたのではないだろうか。

また陳留の路粹（？—二二四）は、ただに蔡邕と同郷の後輩であるばかりではなく、若いころ親しく蔡邕から學んだ直系の門弟であつて、魏の魚豢の『典略』に、

粹、字文蔚。少學於蔡邕。初平中、隨車駕至三輔。（『魏志』王粲傳注引）

と見えるように、師の蔡邕と共に獻帝の長安遷都に扈從している。だとすれば、當時の路粹は、當然のことながら長安でも常に親しく蔡邕の左右に侍っていたに相違ない。なお、路粹と同じく若いころ蔡邕に學んだ同郷の直系の門弟に、建安七子の一人に數えられる阮瑀（？—二二二）がある（『魏志』王粲傳）。しかし彼の建安以前における動靜は全くわからない。恐らく郷里の陳留で隱逸的な生活を送っていたのであろう。

以上のほか、董卓政權下にあつて蔡邕と親交があつたと推定される人物には、かつて彼の議郎時代に東觀で著作を共にした馬日磾・楊彪（いずれも前述）という高級官僚がいる。ちなみに両者は、蔡邕ともども靈帝遷都に従つて洛陽から關中に入り、以後蔡邕の存命中、馬日磾は太常・太尉を歴任し、楊彪は大鴻臚・少府・太常と昇任していった。なお、楊彪の嗣子楊脩（一七五—二一九）は、曹植との往復書簡で知られるように、後に建安文壇の一翼を擔うこととなる有力な文人であるが、當時この楊脩もまた恐らくは確實に父親とその起居を共にしていたはずである。

そして、これら蔡邕をめぐる董卓政權下の學者文人たちは、ただに文辭の創作に興じていたのみならず、學問的な「遊談」にもその才智を競い合つていたように見受けられる。例えば、蔡邕にまつわる逸話として、晋の『袁山松後漢書』に、

（王）充所作『論衡』、中士未有傳者。蔡邕入吳始得之、恒祕玩以爲談助。（『後漢書』王充傳注引）

といい、また『後漢書』儒林傳下（趙曄）にも、

趙曄、字長君。會稽山陰人也。……曄著『吳越春秋』『詩細歷神淵』。蔡邕至會稽、讀『詩細』而歎息、以爲長於『論衡』。邕還京師、傳之。學者咸誦習焉。

と見える記録は、そうした遊談の狀況を窺わせるに足るものであり、且つ後者の挿話は、かかる京師の遊談の場においても、やはり蔡邕がその主導的な位置にあつたことを物語っているものようである。

結 び

これを要するに、董卓政權下の初平年間、當時は全国各地が極めて不穩な情勢であつたにもかかわらず、ひとり西部の上層社交界では蔡邕を中心として學者文人たちが相集い、その顔ぶれは、天下に比類なく豪華で多彩なものであつた。なかならず建安文學の優れた先驅者である孔融、建安文壇隨一の辭賦作家である王粲、同じく建安文壇の一翼を擔う邯鄲淳・路粹・楊脩等は、正に次期の貴族文學のために用意され、その文學を格段と興隆せしめた稀世の文人たちであつた。このような狀況を眺めた場合、これに更に蔡邕の門弟で

阮瑀、少有偉才、應機捷麗。就蔡邕學、歎曰「童子奇才、朗朗無雙」。（『太平御覽』卷三八五引『文士傳』）

と稱せられた阮瑀を加うれば、蔡邕をめぐる當時の文人たちの陣容は、すでに建安文學の中樞の骨格を力強く作り上げていたといつても過言ではない。

ついで建安年間、彼等を含む出色の文人たちを全国各地から中央宮廷に招集した権力者は、いうまでもなく魏の太祖曹操（一五五—二二〇）である。そして、この曹操もまた、王子の曹丕（一八六—二六〇）から

家公（曹操）與蔡伯喈有管鮑之好。乃命使者周近、持玄玉璧於匈奴、贖其女還。〔太平御覽〕卷八〇六引魏文帝「蔡伯喈女賦」序

といわれたように、蔡邕とは互に相許した極めて親しい僚友であり、かの孔融と同様に亡き蔡邕を心から懐しんだ文人であった。

とにかく以上に述べたように、蔡邕は、後漢末期という長く険しい動亂時代を能く堪えて、兩漢以來の宮廷貴族文學を生涯かけて支え通した當代隨一の文豪であった。まことに彼の生涯は、時には心ならずも宦官一派の憎悪を被り朔北流謫の悲境に立ったとはいえ、おおむね意識的に時代の喧騒から身を避け、なんとか自分の學問文藝を生かすべく、その時時に適した文化的環境を彼なりに求めて生きつづけたといえる。

そしてまた、そのむかし馬融を頂點とした外戚梁冀時代の宮廷文學は、胡廣・朱穆を通じて幸いにも蔡邕という稀有の俊秀に繼承され、その蔡邕が更にこの貴族的作風を洗煉し擴張充實させた後、曹操はじめ孔融・王粲等を主力とする蔡邕の僚友後輩たちによって、次の建安文壇における文辭の隆昌が招來されることになる。私は兩漢文學から建安文學へとつながる漢魏文學の主要な潮流を以上のように把握したいと考えるが、もし私のこの論考がさほど大きな誤謬を犯していな

ったとすれば、細かな分流はさておき、以後に展開される六朝文學の潮流を方向づける上で、蔡邕が果たした文學史的意義は豫想以上に大きかったといえるのではないだろうか。 (一九七六・五・三二)

注(1) 清の姚振宗『後漢藝文志』卷四（集部、別集類）による。

(2) 張仁青『中國駢文發展史』上册（臺灣中華書局刊、一九七〇年）は、中國駢文史上における蔡邕の重要性を指摘して「伯喈……上承屈宋之遺風、句多偶排、下啓六朝之先唱、固東觀詞章之後勁、兩漢駢文之巨擘也」という（二三四頁）。傾聴すべき見解と思う。

(3) 後世の多くの文學史家が蔡邕をさほど重視しなくなった理由としては、その一つには、南朝の齊梁以降、沈約『宋書』謝靈運傳論や劉勰『文心雕龍』時序篇がいうように、彼を唯だ兩漢駢體文學の掉尾を飾る一文豪としてのみ位置づけて、兩漢・建安という絢爛たる兩文學の谷間に埋没させてしまった事が考えられる。また一つには、主として唐宋以後、宋の王應麟『困學紀聞』卷一三や明の遺臣顧炎武『日知錄』卷一三（兩漢風俗）・卷一九（作文潤筆）にいうように、新たに道德的な立場から蔡邕の碑銘文學を取り上げ、彼の無節操で輕薄な態度を辛辣に誹謗した事も少なからず影響しているであろう。

(4) ただし中國史學者の研究として、最近の論考に丹羽兌子「蔡邕傳おぼえがき」〔名古屋大學文學部研究論集〕史學一九、昭和四七年・同「文人の原形—蔡邕—」〔書論〕二號、昭和四八年〕の二篇がある。特に前者は、その考證も概ね精到周密であつて、本稿を草するに當つても多大の恩恵を受けた。

(5) 鈴木修次「漢魏詩の研究」〔大修館書店刊、昭和四二年〕五一—五三頁。

(6) これらの事例は、鈴木修次氏も指摘しているように、多くの場合、曹丕・曹植を中心とする魏の宮廷において、同席の文人たちが同じ題材のもとに互に文辭を競い合った結果の所産である可能性が大きい。

(7) 蔡邕の「楊賜碑」については、すでに西晋の肇虞「文章流別論」にも、

夫古之銘至約、今之銘至煩、亦有由也。質文時異、則既論之矣。且上古之銘、銘於宗廟之碑。蔡邕爲楊公作碑、其文典正、末世之美者也。〔太平御覽〕卷五九〇引)

と賞賛している。

(8) 『後漢書』黨錮傳(夏馥)に、「夏馥、字子治。陳留圉人也。……同縣高氏・蔡氏、並皆富殖、郡人畏而事之」とあるによる。

(9) 『後漢書』朱穆傳論、ならびに李注引蔡邕「正交論」略による。

(10) 東觀における朱穆の學問的業績としては、唐の劉知幾「史通」古今正史篇にいう。

至元嘉元年、復令太中大夫邊韶・大軍營司馬崔實・議郎朱穆・曹壽雜作獻穆・孝崇二皇、及順烈皇后傳。又增「外戚傳」、安思等后、「儒林傳」入崔篆諸人。……號曰「漢記」。

また彼の文學作品としては、その制作時期は未詳ながら、『後漢書』本傳に列擧する論・策等のほか、「鬱金賦」という芳草を詠じた華麗の作品一篇が残存している(『藝文類聚』卷八一引)。

(11) 『後漢書』延篤傳による。また同傳によれば、延篤の作品に關して「所著、詩・論・銘・書・應訊・表・教・令、凡二十篇」という。

(12) 『後漢書』文苑傳上(邊韶)による。また同傳によれば、邊韶の作品について「著詩・頌・碑・銘・書・策、凡十五篇」という。

(13) 『後漢書』文苑傳上(王逸)に、王延壽と蔡邕とに關して次のごとき有名な挿話がある。

子(王)延壽、字文考。有備才。少遊魯國、作「靈光殿賦」。後蔡邕亦造此賦、未成。及見延壽所爲、甚奇之、遂輟而巳。

もしこれが實話だったとすれば、その時期は、あるいは蔡邕が洛陽に遊學中のことではなかったかと思われる。ちなみに王逸は、安帝・順帝のころ宮廷で校書郎・侍中の官にあり、その子の延壽は年二十餘の若さで溺死している。このような王逸父子の閨歴や年齢を勘案すると、當時蔡邕も王延壽とはほぼ同年齡であったのではなからうか。

(14) 「釋詁」の内容については、丹羽論文「蔡邕おぼえがき」(前掲)九

蔡邕をめぐる後漢末期の文學の趨勢

九一〇一頁をも参照。

(15) このような蔡邕の明哲保身の考え方は、老莊思想というよりも、むしろ「論語」の述而篇「子謂顏淵曰、用之則行、捨之則藏」、憲問篇「子曰、邦有道則仕、邦無道則可卷而懷之」等に見られる儒教思想にその源流が求められる。

(16) この宦官の蔡邕召喚に關聯して想起される史實は、それから數十年後の建安年間の事ながら、禍衡の無禮に立腹した曹操が、彼の善く鼓を撃つを聞き、召して鼓史となし、滿坐の前で彼を辱しめようとした事例である(『後漢書』文苑傳下)。

(17) 李雲事件の顛末については、陳蕃・杜業等の辯護をも含めて『後漢書』李雲傳に詳しい記事がある。

(18) 增淵龍夫「後漢黨錮事件の史評について」(『一橋論叢』四四卷六號)七三三―七三八頁参照。

(19) 参考までに郭太と蔡邕との關係を物語る史料を挙げれば、建寧二年春正月、郭太が太原(山西省太原市)の郷里で卒した時のこと、

四方之士千餘人、皆來會葬。同志者乃共刻石立碑。蔡邕爲其文、既而謂涿郡盧植曰「吾爲碑銘多矣、皆有慙德。唯郭有道、無愧色耳」。(『後漢書』郭太傳)

という有名な逸話がある。郭太は、當時大學諸生の指導者とはいいいながら、他の過激な黨人たちと異なり、測るべからざる深淵な器量を有し、時代の趨勢に對する卓抜な洞察力もある偉大な隱逸的人物であった(『支那學研究』一三號所收の拙稿「郭泰の生涯とその爲人」参照)。蔡邕が郭太の碑文を作つて上述のごとき感懷をもらしたのは、恐らく最後に頼むべき淵博な黨人であった郭太を失い、今さらながら懷舊と思慕の念に堪えなかつたのであろう。

(20) 「汝穎優秀論」については、拙稿「後漢末期の評論的氣風について」(『名古屋大學文學部研究論集』文學八、一九六〇年)一〇二―一〇四頁参照。

(2) 郷里隠棲時代の蔡邕と首都の急進的黨人との關係を示す唯一の挿話として、『世説新語』品藻篇に次のごとくいう。

汝南陳仲舉(陳蕃)・潁川李元禮(李膺)二人、共論其功德、不能定先後。蔡伯喈評之曰、「陳仲舉擧於犯上、李元禮嚴於攝下。犯上難、攝下易」。仲舉遂在三君之下、元禮居八俊之上。

思うに、もしこの挿話が眞實であつたとすれば、陳蕃・李膺という當時相並ぶ黨人の最高指導官僚に對して敢えて兩者の優劣を判定する様なことは、その指導下に屬する黨人たちにとつては到底できることではない。このように蔡邕が兩者の優劣を明快に判定し得たのは、彼が一應黨人組織の局外にあつたからであらうと思われる。

(2) 『後漢書』宦者傳(呂強)によれば、この熹平石經は宦官の李巡の發議によるといい、蔡邕傳にいうところと異なる。すなわち宦者傳にはい

(李) 巡以爲「諸博士試甲乙科、爭第高下、更相告言、至有行賂定蘭臺漆書經字、以合其私文者」。乃白帝、與諸儒共刻五經文於石。於是詔蔡邕等正其文字。自後五經一定、爭者用息。

(2) 『魏志』武帝紀注引『魏書』にいう、
太尉橋玄、世名知名。親太祖而異之、曰「吾見天下名士多矣、未有若君者也。君善自持。吾老矣、願以妻子爲託」。由是聲名益重。
なお、この『魏書』と若干相異なる橋玄の曹操評は、『魏志』武帝紀・袁宏『後漢紀』靈帝紀中・『太平御覽』卷五五七引『魏略』・『後漢書』橋玄傳、および『魏志』武帝紀注引『世語』・『世説新語』識鑒篇等に見

(2) この三人による上奏文の具體的内容は、それぞれ『後漢書』楊賜傳・蔡邕傳・酷吏傳(陽球)に見える。なお、このうち楊賜と蔡邕の上奏に關しては『文心雕龍』時序篇に次のごとくいう。

降及靈帝、時好辭製、造羲皇之書、開鴻都之賦、而樂松之徒、招集淺陋。故楊賜號爲「驪兜」、蔡邕比之「俳優」。其餘風遺文、蓋蔑如也。

(2) 以後における蔡邕藏書の歸屬過程については、『魏志』鍾會傳注引『博物記』に次のごとくいう。

蔡邕有書近萬卷、末年載數車與(王)粲。粲亡後、相國掾魏諷謀反、蔡子與焉。既被誅、邕所與書、悉入(王)業。業、字長緒。位至謁者僕射。

(2) 蔡邕の王粲に對する格別な厚遇の意圖については、すでに丹羽論文「蔡邕傳おぼえがき」(前掲)一〇五頁に卓抜な洞察がある。

(2) 伊藤正文「王粲傳論」(大修館書店『漢文教室』六六・六七)ならびに同「王粲詩論考」(『中國文學報』二〇冊)参照。

(2) 建安文學における辭賦・詩歌の貴族的性格については、拙稿「建安文壇への視角」(『中國中世文學研究』五號)・「五言詩の文學的定着の過程」(『九州中國學會報』一七卷)参照。

〔附記〕 本稿は昭和四八・四九年度文部省科學研究費による總合研究「中國駢文の性格とその史的考察」(代表者岡村繁)の研究成果の一部である。